

阿部知二とインドネシア体験 (一)

—その事実を巡って—

木村 一信

序

小説家、評論家であり、また、英文学者でもあった阿部知二は、昭和16年（1941年）の秋、一枚の「徴用令書」を受け取った。周知のように、昭和14年7月に施行された「国民徴用令」には、「帝国臣民ヲ徴用シテ総動員業務ニ従事セシム」（第四条）との記述があり、太平洋開戦を間近にひかえて、文学者や評論家、音楽家、画家、学者たち、また、新聞や放送などの報道関係者たちのもとへ、いっせいに徴用の声が掛けられたのである。が、もとより「徴用令書」を手にしたいわゆる文化人たちの多くは、ほどなく開始される大戦のことも、自分たちが何の目的で徴用を受けたのかについても知らなかったであろう。

いま、ここに取りあげようとする阿部知二も、そうした一般の文化人の一人であった。阿部は、戦後になってこの折の感想を「十年」というエッセイ風の小説の中で次のように記している¹⁾。

……その時に私の中には、何か軍関係の翻訳仕事でもさせるのか、という甘い想像と、ルーデンドルフ総力戦的思想の連想からの、もしかすると北海道の炭坑にでも、われわれインテリを送りこむのかも知れぬ、という暗い疑念とが、こもごもに入り乱れた。

やがて、陸軍報道班員（宣伝班員）として南方へ送られるということ、軍属という身分ではあるが兵士と行動を共にし、戦場に身を挺すること²⁾などが知らされる。「体格検査」³⁾を受け、一週間ほどの準備期間を経た後、阿部は麻布の第三連隊に入れられ、約一ヶ月の間、同じくインドネシアへ派遣される武田麟太郎、北原武夫、大江賢次といった作家仲間と共に、「一兵卒として鍛え」⁴⁾られるという体験をもつ。その間に、12月8日の真珠湾攻撃、すなわち太平洋戦争の勃発があり、事態の容易でないこ

とを認識させられた。明けて、翌昭和17年の1月2日に阿部らのジャワ組宣伝班員たちは東京の品川を立ち、大阪から船に乗せられて、台湾の基隆へと向っていった。「徴用令書」を受け取ってインドネシアに赴き、帰国するまでの一年余りにわたる阿部知二の「戦争体験」は、このようにして始まったのである。

本稿は、「南方徴用作家」として当時の蘭領東印度、いまのインドネシアへ進攻し、占領地にて宣撫・宣伝活動に従事した一文学者阿部知二に焦点を絞り、知識人としての彼がどのように戦争と関わったか、あるいは関わることを余儀なくされた状況下において、どのような思いを抱き、何を文章として表現したのかを探ろうとするものである。すなわち、戦争という非文化的な事態と、自己の存立基盤としての文化への関わりといういわば相対立する状況のただ中に身を置かざるをえなかった一人の文学者の行動と思考を辿ってみようとするものである。こうした観点から、阿部知二についての三部から成る小論を構想しているが、本稿はその序章にあたる。

そこで、続稿も含めて小論を進めるにあたっては、以下のような三つの視点を設定することが考えられるであろう。第一の視点は、インドネシアにおける阿部知二の足跡、行動についての事実を明らかにすることである。これは、文学者の戦争との関わりというテーマから言っても必須とされる事柄であり、かつ、事実の追究は作家研究の基軸をなすものであろう。第二の視点は、そうした戦時下にあつてどのような文章を書いていたかを捉え、作家の真意を探ってみることである。厳しい制約のもとにあつた報道関係者はもちろんのこと、文学者たちもその言論は軍当局や内閣情報局の検閲下であり、反戦思想はもとより自由主義思想の持ち主とみなされればその身は危うくなった⁵⁾。そうした規制にどの程度まで意識的であつたか否かは、個々の文学者によって異なるが、阿部知二の場合はどのようであつたのか、また、戦地において阿部が何を描いたかは自らの戦争体験を語るものとして重要であることは間違いない。第三に、戦争後にその体験をどのように整理し、自らの文学的営為のうちに位置づけようとしたのかという視点を設定してみたい。これも作家によって大きく態度を異にする事柄であるが、阿部の場合は、長くこの問題に強い関心と執着を示し続ける。

阿部は、昭和21(1946年)年7月、「死の花」を発表し、戦後のいわゆる「ジャワもの」の作品を開始する。この作品以降、晩年に至るまでの間に、阿部はインドネシアを舞台とし、そこでの体験を題材とした作品を十数篇書きついでいき、また、ジャワ体験を描くことを直接の目的とはしていない作品においても、幾度かその体験の一端を点綴していくのである。その死によって未完中絶の作品となつた「捕囚」においても、阿部はジャワ体験を印象的な場面として生かし、書き記している。つまり、戦

後の阿部文学にとってインドネシア体験は、無視することのできない重要なファクターであり、また、阿部知二文学全体のテーマやその評価といった問題とも関連を有する事柄であると言ってもよいと思われる。本稿においては、第一の視点として設定した問題、すなわち阿部知二のインドネシアにおける足跡、行動についての追究を中心として論述を試みたい。

I

『阿部知二全集』第13巻⁶⁾に収録されている福田久賀男編の「年譜」に記された阿部のインドネシア行に関する事項は、以下のようになっている。

昭和16年 1941年 38歳

……徴用令を受け、陸軍宣伝部班員として麻布第三連隊の兵営に入舎。

昭和17年 1942年 39歳

1月、東京を出発、台湾の高雄、インドシナのカムラン湾に寄り、3月1日、ジャワのバンタム湾に上陸の予定だったが、船が撃沈され、夜の海を泳いだ。主としてジャカルタにいたが、バリ島なども視察した。この間、胸部疾患のため、東部山中セレクトで療養、12月、帰国。

現在のところ、各種の文学全集などの阿部知二集所載の年譜においても、上に引いた福田編「年譜」以上の詳細さは見られない。ただ、筑摩書房版の『現代日本文学全集44 阿部知二 伊藤整 中山義秀集』（昭30・7）に収められている阿部の「自筆年譜」には、「昭和17年」の末尾近くに、「南海の自然の美しさと戦争のいとわしさと、心を乱した」と記されており、この時期の阿部の心情の一端をうかがい知ることができる。そこで、福田編「年譜」を補うべく、これまでに調査した諸種の文章を参考にして、現時点において判明している事実や年月日などを記してみたいと思う。やや煩瑣になるが、事実を推定する根拠となった文献は、注にて示しておくことにする。

昭和16年（1941年）

11月10日前後、静岡県興津に滞在中、徴用令書の届けられたことを自宅からの電話にて知る⁷⁾。

11月17日（月）本郷区役所に出頭する。体格検査を受け、合格する。阿部と同じく徴用令書を受け取り、この日、本郷区役所に出頭した作家として武田麟太郎、今日出海、北原武夫、井伏鱒二、尾崎士郎、高見順らがあり、やはり出頭してきた太宰治と島木健作は「胸部疾患の既往症」のためにはねられた⁸⁾。

11月23日(日)または24日(月) 東部軍司令部、教育総監部へ行き、麻布第三連隊の兵舎に「ぶちこまれる」⁹⁾。約一ヶ月の間、軍事教練などの訓練を受ける。奏任官待遇で月俸265円を受ける¹⁰⁾。

昭和17年(1942年)

1月2日(金) ジャワ派遣の宣伝班、品川駅より汽車にて出発。

1月3日(土) 大阪、天保山港よりマニラ丸に乗船¹¹⁾、出航。

瀬戸内海を通り、豊後水道を南下して台湾の基隆港にて下船。高雄まで汽車で行く¹²⁾。宣伝班の作家や画家たちは、高雄郊外にあった「高雄商業学校」に駐屯。同校の「武道場」に寝起きする。新聞記者たちは、「高雄港の海辺に面した旅館」を宿舎とした¹³⁾。

2月6日(金) 輸送船に乗りこむ。¹⁴⁾ 阿部は、町田敬二宣伝班長以下、大宅壮一、大木惇夫、富沢有為男、飯田信夫らと共に佐倉丸に乗船。

2月18日(水) カムラン湾出発¹⁵⁾。

3月1日(日) 未明、バタビア沖海戦を経験する。佐倉丸は敵艦の魚雷を受けて撃沈される¹⁶⁾。阿部らは、重油の浮かぶ海を漂流し、救助され、やがてバンタム湾に上陸する¹⁷⁾。

3月7日(土) 午前、バタビアに入る¹⁸⁾。

3月8日(日) コタ地区にあるエルベルフェルト像を見る¹⁹⁾。

3月14日(土) バンドンに入る²⁰⁾。

5月中旬頃から約一ヶ月、小野佐世男(漫画家)、松井翠声らと共に車にてジャワ島内、バリ島を旅行²¹⁾。

5月下旬 ジョクジャカルタ(ジャカルタを出て1週間目)に入る²²⁾。

—ここで、この旅行の具体的な行程を示す資料を引いておきたい。インドネシアの阿部知二より日本の留守宅にいる長男良雄に宛てられた、昭和17年6月16日付の書簡である。近年、阿部良雄によって公けにされた資料である²³⁾。

良雄君、今度の手紙も大層面白く読みました。君が元気なことを知って何よりもうれしかつたです。写真も大層健康のやうにうつつてゐます。時にこんな手紙を下さい

お父さんは一ヶ月ジャバをまわりました、

バタビア—ポイテンゾルフ(世界一の熱帯植物園のあるところ)—バンドン—ジョクジャカルタ—スラバヤ—それからバリ島—またスラバヤ—マラン—スマラン—チエリボン—バタビア。

富士山のやうな高い山がいくつもあります、軽井沢のやうなところもあります、大椰子林、ゴム林もあります、林の中では猿の群に何度も逢ひました、

みんな自動車で飛ばしたのです、(後略)

8月頃、西部ジャワのスカブミ(スラピタナの山荘か?)にて一週間から十日間ほど

療養する²⁴⁾。

8月20日（木） バタビア放送局と東京の放送局とを結び、阿部はラジオを通して菊池寛と「文人電波対談」を行う²⁵⁾。

8月下旬（あるいは9月上旬）より10月下旬（あるいは11月上旬）まで、汽車にて東部ジャワに行き、マラン郊外のセレクタ（ホテル・セレクタ）にて療養生活を送る。

12月上旬から中旬頃、帰国の途につく。ジャカルタからシンガポールまで飛行機、それから船で帰国²⁶⁾。

12月下旬 東京に帰りつく。

現在までに明らかにすることのできる阿部知二のインドネシア滞在時の年譜的事項は、ほぼ上述したようになるが、これは今後も調査などを続け、より詳細な、正確なものを作成するようにしたいと願っている。

II

では次に、阿部は宣伝班の一員として主としてジャカルタにあって、どのような業務に携っていたのであろうか。この点についての事実を確かめることにしたい。

阿部知二の紀行文・エッセイ集である『火の島——ジャワ・バリ島の記』は、インドネシア時代の阿部の言動、思考や関心事を知るのに格好の書物である。それによると、彼が最初に手をつけた仕事は次のようであった。

宣伝班の忙しい仕事ははじまり、民衆の指導、新聞、放送、日本語教育などとみなが炎熱の中で駆けまはつてゐた。体をこはした私はそれらをあちこち手伝ひながら、ジャカルタの本を調べる仕事を命じられてゐた。幾軒かの本屋、貸本屋、図書館、またそここの個人の蔵書、役所の図書などの中から、日本に有用なものを探し、また敵性に渉るものを没収したりすることだ。

「火と水と泥とを貰いてバタビアに入る」と、「昂奮の気かられて書いて日本の新聞」に文章を送った²⁷⁾という阿部は、上陸時の海中の漂流や、上陸後の七日間に及ぶ行軍——阿部にとっての言葉の真の意味での戦争体験は、実は、戦史の上で「スラバヤ・バタビア沖海戦」とよばれる上陸作戦時の戦いと、敗走するオランダ軍を追つてのバタビア入りまでの十日足らずのものである——の中で体を悪くしていたのである。雨期の明ける頃、すなわちジャカルタでは例年三月中旬から下旬の頃であるが、阿部は「毎日発熱してゐた」²⁸⁾という。そうした中で、上に引いた内容の仕事に従い、「敵性図書の報告書」を作成した阿部は、その後、数ヶ月の間、「文化の戦ひ」を継続

していく。

このことを具体的に伝えるのが、「われらかく戦へり」と題された「朝日新聞」の特派員記者の筆になる五回にわたる連載記事である。「阿部知二氏の巻」は、その最終回に配されていて、昭和17年9月10日の夕刊（東京版）に掲載されている。これまでに紹介されていない資料であり、かつ内容的に見のがしえない事柄が記されているので引用してみたい。記事には、ジャワ島上陸以来五ヶ月、阿部の「文化の戦ひ」は、「学術および文化機関の調査報告」となって結実したとあり、さらにその「調査報告」の詳しい内容として次のように記されている。

バタビア博物館をはじめ古文書館、ジャワ協会、バタビア協会、文化大学の研究機関などの文化、科学の分野からバンドンの癌研究所、医科大学などに関する医学の分野、更にバタビア気象台、バンドン地質博物館などの諸自然科学の研究機関や、バイテンゾルグ植物園その他東印度の学術と文化の状況をあらゆる角度から解剖して纏めあげたもの……

さらに記事は、「報告書」の結論として述べられた、次のような阿部の文章を引用している。

健康な思想と高い精神文化を持たない民族は亡ぶ。(中略)……東亜の文化は東亜人の手で建設しなければならないといふことを痛切に感じる。そしてこの目的を貫徹するためにはジャワを中心とする南方一帯の学術、文化の調査研究、保護および指導を計る一方、日本および大東亜共栄圏各地との文化的交流の促進を計るための健全な組織として「南方文化協会」の設立を提唱する。

ここに言う「南方文化協会」の実態は、現在のところ十分にわかってはいない。3月9日の蘭印軍無条件降伏以来、今村均中將を軍司令官とする日本軍は軍政を開始する。軍政施行のための布告や治政令が次々と出されていく中、3月下旬には早くも「大東亜文化協会」が結成され、その初会合を開いたとの新聞記事²⁹⁾がある。もちろん、阿部知二らの宣伝班員が出席した旨が記事にはある。

さらに、掲載紙名、月日の不明の新聞記事であるが（内容から推測して6月頃と思われる）、軍政部文化行政当局の外廓協力機関として創設されるところの「ジャバ文化協会（仮称）」について報じている切り抜きがある³⁰⁾。先きの「南方文化協会」、また、「大東亜文化協会」、さらにこの「ジャバ文化協会」といった協会の相互の関係やその実体など、不明のところが多く、これは今後の調査課題の一つである。

ともあれ、阿部はジャワを中心に、「南方一帯の学術、文化の調査研究、保護およ

び指導」といった仕事に携っていたことは確かであろう。いますぐ前に引いた「ジャバ文化を復興」との見出しのつけられた掲載紙名、月日の不明の新聞の切り抜き記事には、「各地の学術文化機関を三ヶ月に亘つて実地調査報告した結果」が報じられており、それと共に注目すべき事柄が記されている。

なほ蘭人学者で監禁捕虜となつてゐるものでも純粹科学研究に専念する学者は研究を続けさせる方針であり、すでに考古学者として令名あるファン・デル・ホープ博士、インドネシア慣習法の権威 E・R・スボモ博士、パスツール研究所主任オツテ教授など多くのオランダ人学者が真に文化の擁護者である日本軍の寛大な処置に感泣しつつ孜孜として研究を続けてゐる。

この記事に注目したいのは、戦後になって阿部がインドネシア体験に題材を得て小説を書いた際に、敵性国人の学者保護に関わる問題を繰り返し取りあげているからである。「ジャワもの」の嚆矢となった「死の花」をはじめいくつかの作品において、ジャワの学術・文化を戦争の混乱から守るべく尽力する、阿部自身をモデルとしたと思われる人物が作中に描出される。と共に、その人物の軍当局と対した折の無力さや知識人の非力さへの絶望の思いも語られている。この点については、もちろん、戦後に書かれた小説であるから叙述が可能になったと言える面もある。阿部は、日本の新聞や雑誌などの求めに応じてジャワでの宣伝、文化活動の模様を日本の内地向けに執筆したり、また、ジャワ現地軍発行の「うなばら」（前身は「赤道報」）紙に寄稿したりする一方、このような文化の擁護に関わる仕事にそのエネルギーを費していたのである。

戦後になって、阿部の「思い出話」が元宣伝班長であった町田敬二の書物³¹⁾の中に紹介されたことがある。それによると、阿部はジャカルタの博物館や図書館、ボゴール植物園と付属植物学研究所など、ジャワにある数多くの「学術的施設」が「日本軍の部隊」によって荒されないよう、「現地の「うなばら」新聞や内地の新聞、雑誌などに書いて、その所在と価値について注意を促し」たとのことである。さらにまた、戦時にもかかわらず黙々と研究を続けていたオランダ人学者について、「次々に収容監視され」ていくことを防ぐために、阿部と北原武夫は今村均軍司令官に面会を求め、学者のリストを提示して、軍司令官より「学術研究のため文化財の保護は必要である」との言質を得、学者たちの研究活動を従前どおりに可能にした旨が述べられている。その際、天皇の「蘭印の自然科学者を大事にせよ」との言葉が効を奏したと、阿部は戦後の小説の中に記している。町田の証言や阿部の小説中の記述などは、先き

の新聞記事と内容的に同一の事柄ではあるが、戦時下の新聞にはここまではっきりとは書き表わしえない制約のあったことがわかる。このように、阿部は学術、文化、ひいてはそれらの担い手である学者や文化人といった人たちを、たとえ敵国人であっても保護することに自らの使命を感じ、そこに徴用を受けて異国にあった自らのアイデンティティーを見出していたとみなすことができるであろう。

三たび引くことになるが、そのことを強く感じさせるのは、先きの「ジャバ文化を復興」との見出しのある新聞記事である。そこに、「阿部知二氏の話」として談話が引かれており、その中に前後の文脈からはずれて唐突に、「私は一作家であり政治力がない」との一言があって読者の注意をひく。おそらく、学者や文化人擁護といった問題が、阿部にとっていかに困難を伴ったかを示す証左と言えるものではないだろうか。

たとえば、「死の花」の話の中心は、「蘭印の自然科学者」の保護に関してきた、「自由な考を持」った「人道家」の主人公が、親しくなったオランダ人を救うべく努力するが、結局は徒労におわってしまうというものである。東部ジャワのマラン郊外セレクトアにて病いを養っている作品の主人公「比延」は、この地を開拓し、果樹園、牧場、別荘地、ホテル、プールなどを作って楽園を築きあげた一オランダ人が、日本軍（軍属が直接には手を下す）によってすべてを接収され、果ては銃殺されるという運命にままわれるのを、なすすべもなく見守らざるをえないのである。軍と、人間的つながりとの板ばさみになった苦しみ、理不尽さへの怒りと自らの無力さなどが作品の中心テーマとなっている。一方で、南方の至福を享受し「放縦」に身をまかせる主人公の姿も作品の底流には華かな自然描写と共に配置されてはいるのだが。ともあれ、オランダ人の家族や友人たちの一縷の望みを寄せられた「比延」であったにもかかわらず、「政治力」のなさゆえそれに応えることもできず、ただ彼らの「冷たい静かな眼つき」の前に身をさらすしかなかったという思いが、作者阿部の学者、文化人保護という仕事に携っている中で、たえずつきまとっていた感慨ではなかっただろうか。「ジャワもの」とよばれる作品群において、それが如実に吐露され、そこからくる「後めたさ」³²⁾の感情に痛みを抱き続けていたのが戦後の阿部知二であったと言つてよいであろう。

Ⅲ

いま一つ、インドネシア時代の阿部の仕事について眺めてみることにしよう。東部ジャワ、セレクトアでの二ヶ月余りにわたる療養の後、阿部は日本へ帰るまでの間、ジャカルタの放送局において仕事をしてきた。現在までのところ、このことについて

の客観的な資料はないと言っていい³³⁾。だが、阿部が「ジャワもの」の小説にて繰り返し書き記しており、他のインドネシア体験に素材を得た作品の場合と同じく、虚構の手は加えられているものの、素材や事件、背景などは実際にあったことと考えられるので、事実とみなしうるであろう。たとえば、「枯れたる葵」（昭26・4）には、次のように記されている。

私は胸を悪くして、山地で二ヶ月以上も療養してジャカルタに帰って、ぶらぶらとしていた。そういう私に用務があるはずもなく、早く内地に送還するというのが軍の方針だったらしいが、船もなかなか無いままに、オーストラリアや印度を目当の英語放送を、帰るまで少しでも手伝え、ということになった。

放送局では、敵性国人で英語のできる人が日本軍によって使われており、阿部は、「その虜囚たちのなかのだれかが作成する物語や解説の類をしらべたり指導したりする」（「罪の日」昭22・1）といった内容の業務に携っていたようである。ここでも阿部は、放送局で働くオランダ人、ことに夫が収監され、子供をかかえて生活苦にあるオランダ夫人への同情、援助から軍との板ばさみの立場に立つことになり、自らの無力を意識させられる。

いま一つ例示してみよう。「罪の日」は、「ジャワもの」の第二作目にあたるが、主人公は「死の花」と同じく「比延」である。次に引く場面から、作者と等身大の人物と言っていい「比延」の、統治する側の人間とヒューマニスト、「英米自由派」としての自己とにひき裂かれた心もち、あるいは板ばさみにある微妙な立場などがうかがい知れるであろう。「アンナ」は放送局で働く夫人であり、「老女」はその友人である。

「死ぬる自由もないのかしら。ただ忍んでみてあてどもないことを期待しながら生きて行くのかしら。（略）」アンナは絶望的な溜息をしてゐた。

「あなた（比延をさす——引用者・注）は、比較的に親切な人だとおもいます。」老女はいつた。（中略）アンナは両手で顔をおさえてうつぶしてゐた。

「この戦争で、人は寛恕といふことを忘れたのだらうが、平和がくれば、その心が戻つて来ないとはいへぬ。私のいひうることは、それだけだ。」比延はいつた。

「それだけをいふのでも、日本人としては勇気が要るのでせうね。」老女は、こんどは皮肉でなくさういつた。

こうしたジレンマに立たざるをえない人間の姿は、「ジャワもの」に共通するパターンである。昭和21年5月、インドネシア体験に題材を得た戦後小説の第一作「死

の花」(昭21・7)を発表する前に、阿部は「漂浪の苦味」(『東西』所載)と題した短いエッセイを書いている。そこには、戦争によって受けた「心身の痛手」は「案外に大きいやうだといふことは、今頃になつて漸く身に覚えて来た」とある。また、その「痛手」は、「自らが加害者兼被害者であるといふやうな怪しい事態」から発するものであると言い、「この数年のいはゆる文化人と称するもの」の、背負わねばならない役割について次のような意見を述べる。

……一人一人が、この数年間のおのれの生活の中の苦渋の正体を突きつめることをしなければならぬのではないかとおもはれる。文学もそこからはじめて芽を吹き出すのであらう。

ここに言われた「苦渋の正体を突きつめ」ようとする衝動こそ、阿部の戦後の「ジャワもの」を生み出すモチーフであると解してよいであろう。「心身の痛手」といい、「苦渋」といった言葉の実体は、インドネシアにおける学者、文化人の保護、ジャカルタ放送局での英語放送の原稿の「指導」などの際に味わったジレンマの苦しみであったにちがいない。

さて、こうした阿部ではあったが、「ジャワもの」を通してみると、もう一つの強いトーンを有したテーマが顔をのぞかせていることに気づく。それは、インドネシアの地において阿部は、支配者と被支配者という関係ではあったが、「西欧」との出会い³⁰を経験したという点である。イギリス文学を研究し、西欧文化への憧れと崇拜という精神遍歴を経た阿部にとっては、ジャワで身近に西欧人と接触しえたということは、一面喜ばしいことであった。そして、その出会いの内実は、主に女性、しかもその官能を通してのエロティッシュなものであったと言うべきであろう。詳述することは、続稿の作品論を展開する機会にゆずらなければならないが、その具体例を二つほど示しておくことにしたい。まず、「枯れたる葵」では、

私は、じつは謹厳などではなく、戦争と熱帯の風土との二つのために、とり分け放縱の悪徳をつのらせて、街で、いや時としてはこの局内(ジャカルタ放送局内をさす—引用者・注)ですらも、色さまざまなあの女この女に、心を奪われ眼を奪われつつけていたのだが、……

とある。先きに見た「アンナ夫人」への助力、自らの力の無さへの失望と共に、夫人への関心、執着も同時にあったということである。いま一つ、引用してみると、たとえば、「混血—酒場にて—」(昭和26・11)では、

バタヴィア、バンドン、スラバヤ、スマラン、マラン—なぞの異国の都市、それから高い青い山々の中の涼しい避暑地と、そのホテルやプール、また哀切な夜のガメランの音楽のながれ、熱帯の花々の昼のかがやきと夜の匂い、また、金髪碧眼の女たちや褐色の女たち……

というように、ジャワの思い出、とりわけ「女の美への憧憬」にノスタルジアをかきたてられる人物が描かれている。これに類する表現や描写は、まだ他の作品にも見出すことができる。「罪の日」という作品の表題「罪」には、統治する立場にある者の罪悪感といった要素と共に、こうした官能的惑溺に身を委ねたところの、前節の末尾に引いた「後めたさ」がやはり揺曳しているのではないだろうか。

宣伝班員の一人として携わった仕事における「苦渋」と、その反面、南国の旺盛な自然の美しさの中で官能的逸楽に身を委ねたこと³⁵⁾、この二面性こそ阿部のインドネシア体験の基軸をなすものである³⁶⁾。それがどのような表現を得て、作品へと結実しているのか、あるいは、我々はまた、作品から何を読みとり、どのように阿部のインドネシア体験を意味づければよいのか、続稿にて確かめなければならないであろう。

以上、東京を立った日から数えてほぼ一年に及ぶ阿部知二の戦争体験、すなわち主としてインドネシア体験における足跡とその行動とを中心に辿ってきた。最後に、論者が現地にて調査した事項をふまえて作成したところの「1942年（昭和17年）時における阿部知二関連、バタヴィア（ジャカルタ³⁷⁾）復元地図」を図表として掲げておくことにする。まだ十全なものではなく、今後も補訂を加えなければならないが、現時点で判明しているところを示しておくことにする。場所の比定に関しての誤まりや不備、不明の点について教示いただければありがたい。

なお、「復元地図」作成に際して参考としたのは、

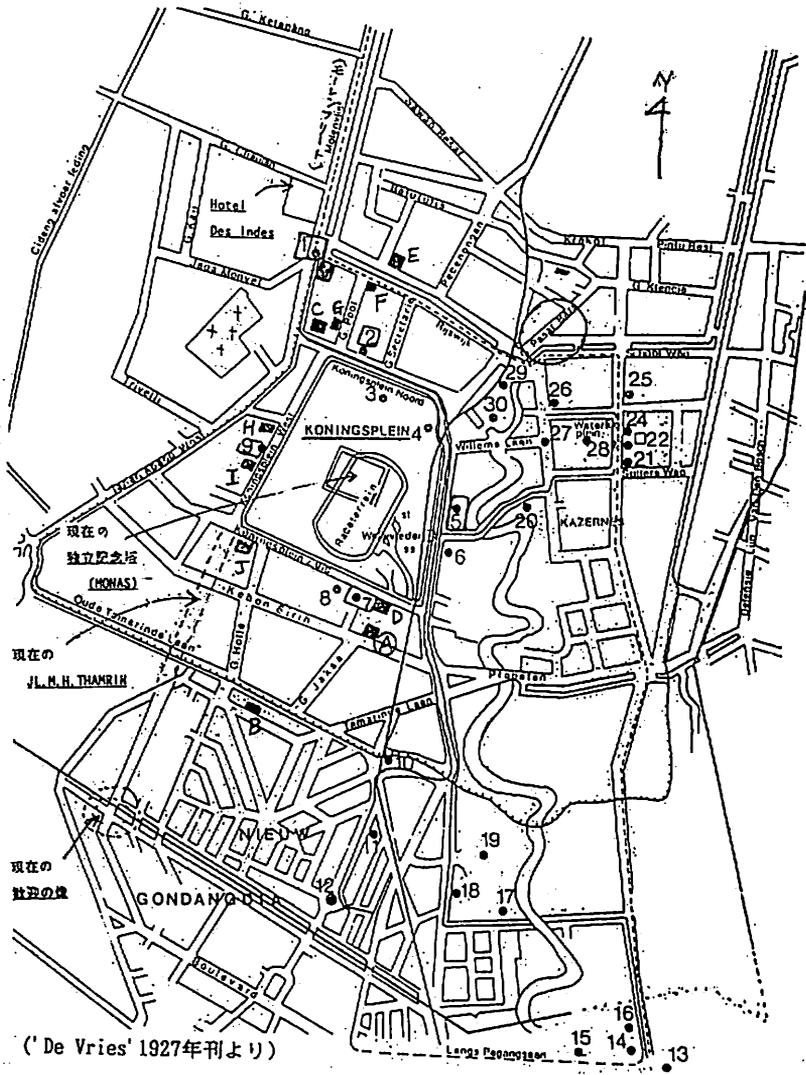
- (1) 「BATAVIA」(地図) 1935年刊。
- (2) 「TOWN PLAN OF BATAVIA」(地図) 1945年刊。

—以上の(1)、(2)は、ジャカルタのインドネシア国立図書館 (Perpustakaan Nasional R.I.) 所蔵に拠った。

- (3) 西嶋重忠著『証言インドネシア独立革命』(昭50・6 新人物往来社)。
- (4) 清水斉(元宣伝班課長)より、木村一信宛書簡(1991.1.9日付)における証言。

である。また、<注記>における矢印(←)は、その事項について触れている文章を指すものである。

〔図表〕 <阿部知二関連／バタビア（ジャカルタ）1942年復元地図>



<注記>

- A — 阿部知二，北原武夫住居。クボン・シリー（Kebon Sirih）10番地。元蘭印副総督・経済相ファン・モーク（Dr. H. J. Mook）邸。現在は，10～12番地にわたって銀行（BANK DUTA）がある。←阿部知二『火の鳥』（昭19・7），富沢有為男『ジャワ文化戦』（昭18・7），北原武夫『雨期来る』（昭18・9），「朝日新聞」（昭17・9・10夕刊）記事など。
- B — 武田麟太郎住居。スマトラウエイ（Sumatera Weg）47番地。←新田潤「ジャワの武麟」（昭30・1），庄野英二『絵具の空』（昭37・12），大谷晃一『評伝武田麟太郎』（昭57・10）など。
- C — 宣伝班本部（旧英国領事館）。
- D — 南方文化研究室（旧王立蘭印自然科学協会図書館，K・N・V）。ガンビル（Gambir）11番地。別枝篤彦らが赴任。現在は，市立図書館となっている。←田中館秀三『南方文化施設の接收』（昭19・4），町田敬二『戦う文化部隊』（昭42・2）など。
- E — 中央文化センター（Pusat Kebudayaan），のちに啓民文化指導所（昭18・4設立）。←『ジャワ年鑑（昭和19年）』（昭19・7，但し，復刻版 昭48・6に拠った），町田敬二前掲書など。
- F — 啓民文化指導所分室（美術・工芸部門）。← Agus Djaya（画家。元啓民文化指導所，美術・工芸部長）の1991年9月6日，ジャカルタの自宅における証言（倉沢愛子，Siti Adiyati Subangun，木村一信が聞く）。
- G — ホテル・パビリオン（Hotel De Pavillon）。宣伝班員たちが，当初宿舎にしたところ。←町田敬二 前掲書など。
- H — ニロム（ジャカルタ）放送局（現在は，R.R.I Radio Republik Indonesia）。
- I — 憲兵隊本部（現在は，インドネシア情報省）。
- J — 第16軍司令部。
- 1 — ハルモニッククラブ（将校集会所）。
- 2 — 第16軍司令官官邸（元蘭印総督官邸，現在は大統領官邸）。
- 5 — 軍政監部（元バタビア石油会社）。
- 7 — バタビア市庁舎（現在，ジャカルタ市役所）。
- 9 — 国立博物館。
- 印付近— ジャワ会館，バー・コージーコーナー（ロシア人経営，阿部知二の行きつけの店），バー・津軽などがある。
- なお，地図上には指示していないが，他に大木惇夫，浅野晃，富沢有為男住居，マデオン（Madiun）1番地，大宅社一住居，プガンサン・ティムール（Pegangsaan Timur）などがある。

<注>

- 1) 『世界』昭25・5。なお、この時にやはり徴用を受け、フィリピン派遣組となった今日出海は、「比島従軍」(昭19・11、創元社)の中で、阿部から電話を受け、「君は仏蘭西語だし、僕は英語だから、矢張り翻訳官だね」と語り、「答へのない疑問の周辺を逍遙してゐるらしい」阿部の様子を記している。また、阿部と同じくジャワ派遣組となった大江賢次は、「故旧回想」(昭49・11、牧野出版社)の「阿部知二と武田麟太郎」において、指定された本郷区役所で阿部と顔を合わせた際、阿部は「おいきみ、おりゃ工場に向かんよ、絶対にぶきっちゃなんだから」と大江に言ったとのことである。さらに、奥出健は高見順の『昭和文学盛衰史』を引用して、「炭坑にでも働きに行かせられるのだろう」と思った高見の心持ちを紹介している(「徴用作家の戦争——ビルマ・マレー方面班を中心に——」『近代文学研究』第8号、1991・5)。
- 2) 神谷忠孝は、「南方徴用作家」(『北海道大学文学部人文科学論集』第20号、1983～1984)において、「ドイツの宣伝中隊＝PK」にならって、太平洋戦争開戦時、陸軍・海軍の報道班の組織されたことを述べている。
- 3) 今日出海「比島従軍」、前掲書。
- 4) 大江賢次「故旧回想」、前掲書。
- 5) 高見順の「文学非力説」(昭16・7)が高見の「身を危くするしろものであった」ことについて、奥出健は、情報局内秘匿雑誌『出版警察報』などを引いて論証している(「高見順<文学非力説>を繞って」『国文学研究資料館紀要』第9号、昭58・3)。
- 6) 1975・7、河出書房刊。
- 7) 阿部知二「十年」。
- 8) 今日出海、前掲書。高見順『昭和文学盛衰史』(昭33・3、文芸春秋新社)。
- 9) 阿部知二「十年」。
- 10) 大江賢次、前掲書。
- 11) 大谷晃一「評伝武田麟太郎」(1982・10、河出書房新社)。
- 12) 大谷晃一、前掲書。大江賢次、前掲書。浅野晃「大宅壮一の思ひ出」『民間伝承』、291号、昭46・3。
- 13) 町田敬二「戦う文化部隊」(昭42・2、原書房)。浅野晃、前掲書。十河雁「ジャワの武田麟太郎」(『小説公園』昭32・4)。
- 14) 浅野晃、前掲書。
- 15) 浅野晃、前掲書。町田敬二、前掲書。
- 16) 町田敬二、前掲書他。
- 17) 阿部知二「火の島」(昭19・7、創元社)。
- 18) ～22) 阿部知二、前掲書。
- 20) 浅見晃「遠征前後」(昭19・5、日本文林社)
- 23) 「父の手紙 母の手紙」『婦人友』(1990・1)。戦時であるので、具体的な行程などを記した手紙は通常は出せなかった。この手紙は、「朝日新聞社の特派員の伝手」によって「東

京の本社を経由」して送られてきたものであると記されている。

- 24) 推定。
- 25) 昭17・8・21日付、紙名未詳新聞記事。
- 26) 「年譜」（阿部知二の自筆）、「昭和文学全集49」所収（昭29・11・30角川書店）。
- 27) 現在までのところ、未発掘。
- 28) 阿部知二「火の島」、前掲書。
- 29) 「朝日新聞」昭17・3・28日付。
- 30) 阿部良雄宅に切り抜きとして保存されていたものである。竹松良明よりコピーにより提供された。
- 31) 「戦う文化部隊」、前掲書。
- 32) 小島信夫「無念の爪」『新選現代日本文学全集 阿部知二集』（昭35・2、筑摩書房）。
- 33) 近年、オランダにて『この半抑留のなかで—ヤンセンの日記、バタビア／ジャカルタ、1942—1945年』（富永泰代による直訳）が刊行された。ヤンセンは、オランダ人で、インドネシア在任時に3年余り日本軍によって抑留されていた。最初通訳として使われ、その後「ラジオ放送という宣伝メディアに従事」させられた。この日記は、目下、倉沢愛子を中心とするインドネシア近代史研究者のグループによって翻訳が進められていると聞かすが、その中に「阿部」の名が頻出し、「阿部の作品「街」」についての言及もあって、この「阿部」は間違いなく阿部知二であろう。いずれ邦訳が刊行されれば、かなりの点において、ジャカルタ時代の阿部の行動が明らかになることと思われる。ヤンセンは、放送局においては阿倍のアシスタントをしていたようである。富永泰代のヤンセンの日記についての書評があり、この日記の概要がわかる（『東南アジア—歴史と文化—19』1990・5）。なお、このヤンセンの日記に関する事項は、インドネシア近代史専攻の大橋厚子（アジア・アフリカ研究所調査員）に教示を得た。また、ヤンセンの日記中「阿部」の名の出てくる箇所一部分に関しての、大橋による日本語の定訳の提供を得た。
- 34) 阿部良雄は、「父の手紙 母の手紙」において、「それまでは外国といえば中国北部しか知らなかった父にとって、ジャヴァはエグゾチックな「南方」であると同時に西欧との出会いでもあったはずだ」と述べている。前掲書。
- 35) 水上勲は、「死の花」を分析し、「作者自身、明らかにこのような熱帯自然の陶酔的な快楽に強く魅きつけられていることがわかる」との的確な指摘をしている（『阿部知二とジャワ徴用体験』『帝塚山大学紀要』第23輯、昭61・12）。
- 36) 阿部良雄も「死の花」について、「己れの無力感」と「官能的誘惑」といった図式を見事に読みとっている。このことについては、「死の花」を論じる際にあらためて問題にしたい（『解説』『阿部知二全集』第6巻、1975・1、河出書房新社）。
- 37) バタビアが元の名前であるジャカルタに戻されるのは、「治政令第16号」（昭17・12・10公布）「地名改正ノ件」においてであり、そこには「本令ハ昭和17年12月9日ヨリ之ヲ施行ス」とある。すなわち、昭和17年12月から、バタビアはジャカルタへと変わったのである。（『ジャワ年鑑（昭和19年）』昭19・7、但し、復刻版、昭和48・6、ピブリオ出版に拠った）。

<追記>

本稿は、1991年度昭和文学会秋季大会（1991・10・12、於・昭和女子大学）にて、「阿部知二『死の花』の位相——インドネシア体験の意味——」と題して研究発表した拙論の前半部分に補訂を加え、まとめたものである。

また、阿部知二関係の資料に関して、竹松良明氏に多くの教示と協力を受け、インドネシアにおける実地調査に際しては、ジャカルタ在住の久保雄二氏（P. T. WARNA DAINICHI）の助力を得た。記して謝意を表すものである。